

あの頃の風景

田園風景 山形盆地

株式会社オリエンタルコンサルタンツ
東京事業本部 構造景觀G 技術主幹
倉田雅人 KURATA Masato

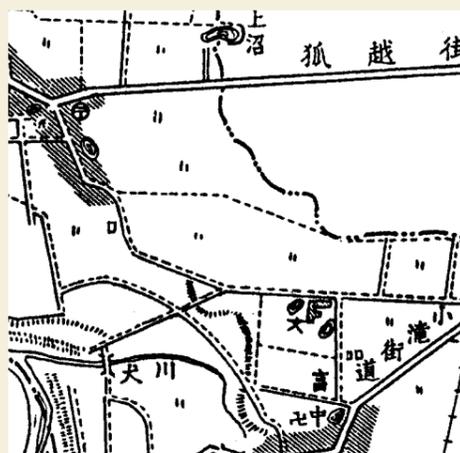


■写真1—昭和30年半ばの山形盆地の田園風景

山形盆地はその名の通り周辺を山に囲まれ、冬には雪が降り寒い時期が続く雪国のイメージが強い。しかし、盆地であることから、夏はフェーン現象によりうだるような暑さになることがあり、日本の最高気温である40.8度を記録している。冬は寒く、夏は暑い、何とも四季折々の風景を持つ地域である。

現在山形市の人口は25万5千人、平成7～12年までの人口増加率は0.3%となっている。しかし、周辺の市、町では減少の地域もあり、県庁所在地である山形市への人口集中が見られる。

写真1は昭和30年代半ばの山形盆地の中央部近くに位置する「はらっぱ」と言われた南沼原地区である。中央に見えるのが周辺の子供達を通った南沼原小学校、遠くに見える山々が西蔵王連峰である。田圃には今では見ることがなくなった稲穂の乾燥風景が見られる。また、田圃のあぜをみると、田圃が細かく区切られ、あぜがあみだくじの様になっており、大規模な区



■図1—昭和29年作成の地図



■図2—現在の地図

画整理がまだ施されていないのがわかる。

この頃の時代といえば、戦後復興から高度成長期への移り変わりの時期に当たる。

写真4、5は昭和45年頃の写真である。この頃から周りの風景は徐々に変わり始めている。食糧確保の効率化のために、土地区画整理がはじまり、小割の田圃が、大きな四角形に変



■写真2—現在の山形盆地の風景(写真1と同一地点)

化している。また、曲がりくねっていた農道が直線の一本道となって行った。しかしこの頃は、まだ田植機による田植えが一般的ではなかったようで、田植機と手植えを同じ場面で見ることが出来る(写真4)。

当時の地図と現在の地図では、道路の本数、土地利用が大きく変わり、田圃が減って、宅地等が増えているのがわかる(図1、2)。

現在、周辺は田圃がつぶされ、郊外型の大型スーパーなどができ、それらの看板が立ち並び、電線が張り巡らされている。

昭和40年後半まで子供達にとっては、田圃は遊び場であり、この中で野球・サッカー・かくれんぼ・秘密基地作り(たんぼの真ん中では何も秘密にはなっていないのだが)が日々繰り返されていた。冬でもこの中を自転車のタイヤにロープを巻き付け(チェーンの代わり)意気揚々と駆け回っていた。

時代も変わり、現代の子供たちは田圃で遊ぶこともなく、彼らにとって田圃は米を作る工場ではないのかもしれない。

ここに育った、とりわけ昭和世代の人間の原風景は「はらっぱ」であろう。田圃ではあるが、周辺には何もなく、遠くに街・山・工場などが見える。昭和前半生まれの世代にとって、まさに昭和30年代の風景(写真1)が原風景なのだろう。時代とともに街は変化し、そこで生活を営む人間も変わっていく。最近郊外型のショッピングセンターなどがはやりだと聞く。人口増加が見られない割には、周辺の風景は変わって行く。どこかで寂れていく街があり、どこかに新しい営みが生まれてくる。そこに生まれ育つ人々にとっては、そこで目にする風景が原風景となり、心の中に焼き付けられるものになる。

新しく出来た風景は、どのような原風景となってここに住む人々に響いているのであろうか。昔ばかりがよい風景だとは言えないが、新たな風景も豊かな心・人をはぐくむ、原風景であってほしい。

〈参考文献〉
ふるさと南沼原 有海 庄右門

〈写真提供〉
写真：倉田秀夫



■写真3—大型車の交通量も多い直線の一本道



■写真4—昭和45年頃の田植え 近所の人と助け合って田植えをする 風景が見られた 背景に西蔵王連峰が見える



■写真5—昭和45年頃の田植機による田植え